

効果的な新聞活用

神戸市立夢野中学校

教諭 山 本 泰

1 はじめに

本校は、平家ゆかりの福原京や清盛塚などがある神戸市兵庫区の北部に位置しており、校区内には史跡や名所が数多くある。NHKの大河ドラマ「平清盛」により、さまざまな催しものが開かれ、その様子が新聞に掲載されることが多かった。地元の中学生在が参加する行事もあり、より身近に感じられた。

「活字離れ」が言われる中、本校では、週3回、朝の読書（朝読）の時間を設けて取り組んでいる。（今年で3年目になる）「継続は力なり」のことばのとおり、本を読む生徒が増えた。休み時間や空き時間などに本を読む生徒がいたり、自習時間に読む生徒がいたり…。

そのような変化の中、新聞をより効果的に授業で活用し効果をあげるため、昨年に引き続きN I Eの取り組みを行ってきた。その取り組みについて、紹介する。

2 新聞を身近に

昨年と同様に、新聞をいつでもだれもが読めるように新聞ラックと新聞閲覧台を設置し、各学年に新聞の閲覧のお知らせを行った。休み時間や放課後に自由に読むことができるように、また、教師が授業で活用しやすいように、今年度も職員室前に設置した。昨年同様、新聞以外にも地域の広報

誌や情報誌も置いた。

〈職員室前の新聞閲覧台。2紙が広げられるスペースを確保した〉



昨年に比べると、読む生徒は増えてはいるが、まだまだ利用する生徒は少ない。また、読んでいる紙面がテレビ欄、スポーツ欄に集中しているのも事実である。新聞の中には、多くの情報があり、どんなことが掲載されているのかを教えていくことが必要である。

3 新聞作成（2年生の取り組みを中心に）

（1）壁新聞作り

2年生は6月に野外活動として徳島県の牟岐に行き、海山の体験活動を行った。その事後指導の中で、学級の班単位（基本は6人で一班）で壁新聞の制作に取り組んだ。あらかじめ、自分の分担箇所を決めて野外

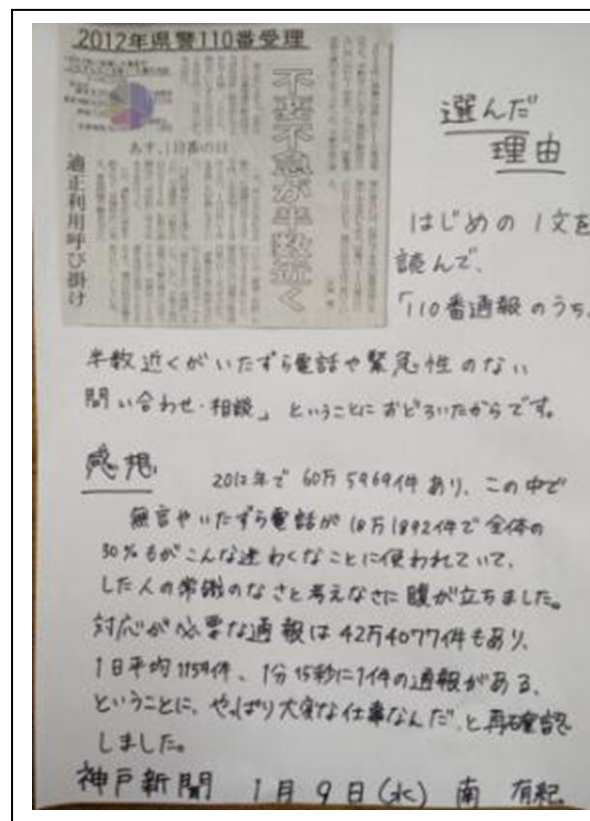
活動中から新聞を書くことを念頭においていた。

トップ記事や囲み記事の位置、段組の仕方、全体の枠取り、見出しの目立たせ方などの注意を受けながら、班で協力して作成することができた。

〈野外活動の壁新聞〉



〈生徒が作成した新聞レポート〉



(2) 新聞レポート

2 学期の終わりから 3 学期の初めにかけて、HR などの時間を活用して、自分の好きな新聞記事を取り上げて、その理由と感想を書くということを、3 時間かけて取り組んだ。

どんな記事でもよい（例えば、料理のレシピでもよい）と言ったので、生徒たちは抵抗なく思い思いに自分の関心ある記事に対して感想を書いた。しっかりと感想が書けているものはクラス内で掲示して、交流を図った。

4 新聞記者派遣

2 年生は平成 24 年の 11 月に「トライやる・ウィーク」の実施に向けて、「働く」ということを総合的な学習の一つのテーマとして取り組んできた。その流れの中で「職業講演会」と称して、新聞記者の方に学校へ来ていただき、新聞記者の仕事について話を聞く機会を持った（平成 24 年 10 月 4 日=木=に実施、産経新聞社神戸総局長・堀洋氏）。

生徒にはどんな話が聞きたいかというアンケートをとり、主だった質問事項をあらかじめ記者の方に知らせて、当日の講演内容の参考にいただいた。質問項目の主なものは以下のとおりである。

〈質問事項〉

仕事をしていて大変なこと・つらいと思ったことを教えてください
この仕事を選んだ理由を教えてください
仕事のやりがいを教えてください
勤務時間や休みがどれくらいあるか教えてください
収入はどれくらいありますか
取材をするときや記事を書くときの工夫や注意点を教えてください
仕事をしていて楽しかったことを教えてください
新聞記者になる道筋を教えてください
新聞記者になるためには資格や免許がいるのですか
どれくらいの時間で新聞記事は完成するのですか

当日、生徒たちのつたない質問内容にもかかわらず、堀氏はこれに一つ一つ答えるように講演を組み立てていただいたおかげで、生徒たちはしっかりと傾聴することができた。また、生徒の感想すべてを送らせていただいたところ、堀氏からご丁寧な返事をいただくことができた。以下、紹介する。

〈堀氏からの手紙〉

夢野中学2年の生徒の皆さんの感想いただきました。ありがとうございました。感想といっても代表の方数人の感想文のようなものを想像していましたので、持ち重りのする封筒が郵送されてきて驚き、感激しました。

生徒の皆さんが想像以上に熱心に聞いていただいたことが分かる感想で、とてもありがたかったです。このような仕事をしていて、人に励まされることはあまりないのですが、感想の多くに「頑張ってください」と書かれていたことに、すこし大げさに仕事の話をしすぎたかな、と反省しています。休みが少ないことや、安月給なことがとても印象に残ったようだったことも、少し意外な気がします。私は、仕事の価値は給料の多寡だけでは測れないということを言いたかったのですが、うまく伝わらなかったようです。新聞記者としての表現力に問題があるのか、それとも、話すのが下手くそなのか。これは悩ましい問題

です。もし機会があれば、給料が安かろうが、体力的につらかろうが、好きな仕事を続けられることは、とても幸せなことなのだと、生徒の皆さんにお話ししていただければ幸いです。

最後に、新聞記者や新聞について若い皆さんにお話しさせていただける機会を与えていただき、ありがとうございました。少しでも新聞が、ただ小難しいことが書いてあるだけの紙ではなく、生きた人間（記者）が伝えるべきだと信じたことを、皆さんに知ってもらおうと毎日努力して作っているものなんだと知っていただけたなら幸せです。本当にありがとうございました。

産経新聞神戸総局 堀 洋

〈新聞記者派遣授業の様子〉



〈新聞記者派遣授業を紹介した新聞記事〉



やはり、生徒たちにとって仕事をしている大人と接するのは教師以外はほとんどない状態である（教師を職業人として捉えて

いる生徒はほとんどいないであろう)。親は外では職業人であっても家庭に帰ると、子どもにはそういう側面はなかなか見えないものである。そういう中で、今回の職業講演会は、かなり近い距離でしゃべっていただいたこともあってか、現場で働く職業人としての堀氏の話は、生徒たちに「働く」ということの意義が少なからず伝わったようであった。

5 新聞の活用

3年生の社会科「公民」の授業では、できるだけタイムリーな記事を授業の最初に紹介し解説した。その時、必ず新聞社名、日付、そして、新聞のどこの紙面に掲載されているのかを伝えた。時間的に余裕があるときは、この紙面にはこんな記事があるということを紹介した。(何度も同じことを繰り返さないと興味もわかないだろうし、理解しにくい)

「公民」の授業に関係する内容となると、政治のことが多くなり、敬遠されがちであるが、詳細に解説することや子どもたちをひとりの大人として接し伝えることで反応は変化した。保護者からは、「家で〇〇について語るようになった」とか「お父さん(お母さん)、それは正しいこと?」とか新聞やニュースを見て、また大人の会話を聞いて話をするようになったという保護者もおられた。

授業でも、「先生、新聞でそのことを読んだよ」とか「新聞でこんなふう書いてあったけど、何のこと?」とか質問する子どもたちが増えたことも事実である。

授業では、必ず「メディア・リテラシー」についての学習をする。N I Eのおかげで

多くの新聞社の新聞が学校にあるため、比較し考えることができる。各新聞社の一面だけを比較したり、同じことがらの記事を並べて比較したりして、新聞の果たしている役割、それを読む私たちが気をつけておかなければならないことを学習するようにしている。

新聞だけでなく、テレビ番組についても同じであることも授業の中で学習させている。例えば、プロ野球中継を行っているテレビ放映についても、どちらのチームが勝ったかによって、ヒーローインタビューの場所や放映時間がちがったりするという事など具体的な事例を通して行っている。

さまざまな角度からものごとを考え、行動できる大人に育ってもらいたいと考えている。

6 今後の課題

2年間、N I Eの指定を受け、さまざまな取り組みを行ってきた。最初のころに比べると新聞を読む子ども、関心を持つようになった子ども、授業で新聞を取り入れることも増えた。さらに興味・関心を持たせ、新聞に接することが習慣化するようにしていきたい。私たち教師側も、創意工夫を重ね、より積極的に取り組んでいく必要がある。

2年間のN I E事業の成果を絶やさないためにも、来年度も引き続き今までの取り組みを継続・発展させていくことが課題である。